J.N.L. デュランの模倣概念について

都市建築における沈殿された意味の蘇生とその脱構築 (1)¹⁾

NOTION OF IMITATION IN J.N.L. DURAND

Reactivation of Sedimented Meanings and their Deconstruction
in Urban Architecture (1)

松政 貞治*

Teiji MATSUMASA

In J.N.L. Durand, the positive imitation is considered as impossible and the analogical imitation is refused, but that of the Ancients is present in their base, not as the purpose of the architecture but as an auxiliary element subordinate to the notions of economy (économie) and suitability (convenance), which is also expanded and applied homogeneously even to the elements, their combination, distribution and composition of city. For him, even if the notion of imitation is transformed into that of subordinate imitation of the Ancients, it is regarded as a moment of the inter-textual movement of meanings in the urban architecture, both within the relation of diachronic correspondance and in the synchronic context, that is not concerned with the distance, and therefore is supported by a kind of typological consciousness.

Keywords : Durand, imitation, urban architecture, sedimentation, meaning, deconstruction

デュラン、模倣、都市建築、沈殿、意味、脱構築

1. はじめに

テキスト理論によると、あらゆるテキスト（意味の織物）は、他のテキストとの関係なしでは在り得ない。もし都市建築²⁾がひとつのテキストであるとするなら、この「間テキスト性」こそ建築的思考を意味の問題から研究するための最も重要な契機であると思われる³⁾。ここから、都市建築の歴史と内的構成を通じて、即ち意味そのものの地平で、この「間テキスト性」に直接関連する概念乃至モチーフを抽象あるいは把握できよう。つまり、模倣、類型、隠喩、集団記憶、類推等の概念である。これらの概念の連鎖を辿り、都市建築をそれらの視点から捉え直す時、沈殿され、成層化され、そして伝承化され、慣習化され、更には翻訳され、変形された都市建築の意味の運動を賦活させ蘇生させることが可能となる。

都市の建築の歴史を遡る時、それぞれの時代に様々な人々が「創造」の名の下に「脱構築」を試みているのを我々は目の辺りにすることができる。しかし実際には文字どおりの創造というものには有り得ない。なぜなら、間テキスト性の内部で、その隠蔽され、沈殿された意味を解体するためには、まずもってそれを賦活させねばな

らないからである⁴⁾。蘇生された意味を解体するには次のような新たな概念が必要となる。即ち痕跡、書くこと、散種、接ぎ木、翻訳可能性、固有語等である。もし都市の建築の起源へと向かう運動が意識されず沈殿された意味の賦活が意識されないなら、あらゆる解体の試みは無意味なものとなるだろう。それは素朴な形態上の戯れか、語彙的な問題に過ぎない。

都市建築の一般の問題性を考える上での「範例」として後に研究することになるバリ・ユニヴェルシテ地区の歴史的形成について具体的に「記述する」前に、まず上述の概念について考察を加える必要がある。その一環として模倣の概念を取り上げなければならない。古代ギリシャ以来の古典主義建築の伝統の中で、この概念を理論づけた中心的な人物としてはカトルメール・ド・カンシー (1755-1849)⁵⁾とJ.N.L. デュラン (1760-1834) が挙げられる。とりわけ両者の模倣概念に関係する差異、つまり「類型」と「モデル」、自然の模倣と形態的語彙的模倣の差異について論じるうちに、「我々の捉えようのない」建築の起源は「原始の小屋」でも「人体比例」でもなく、間テキスト性内部での差異化に他ならないことが明かに

* 大阪大学工学部環境工学科 助手・
仏国第三課程博士Research Assoc., Dept of Environmental Engineering, Faculty of
Engineering, Osaka Univ., Architecte D.P.L.G. C.E.A.A.

なる。この論文は、そうした射程の中で、近代建築及び近代都市論の源流の一端を成すフランスの理論家であり建築家でもあったJ.N.L. デュランにおける模倣（イミタシオン）の概念について論及することを目的とする。

2. デュランの歴史的立場

デュランは古典主義建築の合理主義的思潮の中に位置しながら、その後のヴィオレ・ル・デュクを始めとする歴史主義やジュリアン・ガデ等の折衷主義に影響を与え、更にはグリッドによる構成手法と適合性やエコノミー（組織性）⁹⁾の概念を通じて機能主義の理論的根拠を提供したと捉えることができる。理工科学校で教鞭を取り、その講義録がヨーロッパ中で読まれたという事実から考えても、彼の思想がパリのその後の建築や都市の思想、とりわけランビュトーやオスマンの都市改造⁷⁾に大きな影響を及ぼしたばかりでなく、西洋全体の都市の思想と計画手法にも深く浸透したと考えられる。

デュランの思想を準備したものとして二つの歴史的契機に着目することができるだろう。一方で、18世紀の幾人かの理論家には、言説の修辞と芸術の関係がよく知られていた。芸術については、言語としての建築的主題として取り扱われてきた⁸⁾。他方、類推的模倣は、18世紀の哲学的感覚主義の結果として現われた⁹⁾。ブレと共に活動していたデュランは、建築と自然の間の類推の問いに影響されていた¹⁰⁾。しかし「王立理工科学校建築講義録」¹¹⁾の出版の後には、全体的なヴィジョンにおけるある種の切断が見られる。何よりも建築は自然の現実的表現ではもはやない。建築はその美を固有の原則、エコノミー（組織性）と適合性の遵守に負っている。しかし彼の構成の方法は、なおブレのものから統合され転調された構成の原則に由来している。そこからデュランは構成についての彼自身の考えを手にし、イメージのみを転写しあるいは模倣するためにこの構成を用いることができたのである。デュランにおいては、ブレの模倣の技術（トレーシング・ペーパーや方眼紙のようなもの）は、デュラン自身がそれらをモデル＝デッサンの設計計画を作りながら類推的形象のために用いているとはいえ、結果的に非模倣的な手順のために使用されている。

模倣が建築における古典主義的理論の主要点であると我々は主張することができる。当時それはフランスにおける美学理論の「参照」のひとつの原則を構築していた。デュランもまた模倣を、一般的な意味においてひとつのモデルへの参照として認識していた¹²⁾。またデュランはオーダーと人体の間の模倣についてのウィトルウィウスの論点を批判している。更に彼は、類推的な、離れた、「建築家が行っていると主張するような」模倣と、明確で近い、「画家や彫刻家が行っていると主張するような」模倣とを区別する¹³⁾。しかしデュランはカトルメール・

ド・カンシーにおけるこの区別を採用しているとしても、それらの使用にはひとつの混乱が見られる。カトルメールが類推的な模倣の考え方を推奨しているにも拘らず、デュランはウィトルウィウスにおける模倣の思想を解釈しながら、それを明確な模倣と考えている。カトルメールが「従って建築家が自らに与える諸規則は二重の基礎、つまり類型の明確な模倣という基礎と自然の理念的な模倣の基礎の上に横たわっている」¹⁴⁾と主張する時、この理念的模倣を考えないデュランは、明確な模倣により近く位置している。

自然の模倣と古代の模倣の間には依存関係はない。しかし自然に近づくこととは、古代が自然との間に持っていた関係を研究することになるだろう。このことはあらゆる時代に認識されてきた、芸術の素材における古代性とその規則についての完全な知を含意する。結果的に、古代の模倣を十分に構想するデュランはといえば、直接、自然の模倣を参照することはより少ないということになる。

デュランの模倣概念について建築的現象性（意味）の視点から簡潔に吟味することによって、具体的な用語---ミメシスあるいは模倣、類型、隠喩、類推、集団記憶---についての我々固有の水平的軸の彼方に、どのようにして、本質的で下部構造的な諸概念が、都市建築における意味即ち歴史性、伝統性、理念性として、垂直的に立ち現われてくるのかを記述することを目指さなければならない。

3. デュランの思想の概観

デュランにとって建築は何よりもまず「全ての公共的な及び個別の建築物を構成し実現する芸術」¹⁵⁾である。建築の目的は有用性、保護、幸福である。彼の方法は、建築が「自然に」採用するはずの適合性とエコノミー（組織性）である。それらは、「この芸術の研究と実施において我々を案内することができる唯一の源泉」¹⁶⁾である。適合性に関する一般的な原則は、対称性や、規則性、単純性である：

「それらは、あらゆる所であらゆる時に、建築物を建てようとした場合には、理性的な人間を導いたはずの一般原則である。それらは実際に、次に我々が明らかにするように、最も広く最も正しく賞賛された古代の建築物の構想を可能にした原則である。」¹⁷⁾

既にこの引用は、デュランの思想の基盤を我々に喚起する。彼によれば歴史性は「理性的な」人間を導く手前の原則の特質に他ならない。建築の理念的客観性を保証するのは理性である。それは人間的な「自然」である¹⁸⁾。

デュランによれば、大部分の建築構想の目的は眼を喜ばせることであり、それによって我々のうちに快適な感情を引き起こすことである。芸術一般と同様に、建築家の手になる建築も模倣の過程によってのみ生起することが可能なのである。デュランは、「建築は模倣しながら

喜ばせるために、他の芸術を手本にして自然を模倣しなければならなかった。」¹⁹⁾と付け加えている。

彼によれば、人間によって実現された最初的小屋は自然の対象ではなく、人体はオーダーのモデルとして役立つことはできない。オーダーが素朴な意味で小屋あるいは人体の模倣であるとの考えは、ロジエの視点を批判するデュランによって完全に拒否されている。デュランはまた、小屋あるいは人体の模倣の可能性を主張するウィトルウィウスをも批判している。オーダーの比例と形態は人体から模倣されるのではない。このようにして彼は、小屋あるいは人体の形態の模倣と関係させて、オーダーについての彼の考えの本質を明らかにする：

「ところで、小屋が自然の対象で決していないなら、人体が建築に対してモデルとして役立たなかったなら、あるいは逆の仮定をすることで、オーダーが双方の模倣では全くないなら、そうしたオーダーは建築の本質を決して形成しないし、それらの採用やそこから結果する装飾に期待される快は全く存在しないということ、そして結局、この装飾そのものが空想にしか過ぎず、それにかかる費用は愚かなほど莫大なるものであるとの結論が必然的に導き出されるはずである。」²⁰⁾

もし「オーダーは建築の本質を決して形成しない」のなら、何が建築の本質なのだろうか。ロジエを批判しながらデュランはそれに答えている：

「この著者には奇妙な先入観があるにも拘らず、この芸術は必要性にのみ自らの起源を負い、公共的な、そして個々の有用性以外の目的を持っていないということを彼は認めない訳にはいかないということが分かる。」²¹⁾

そして有用性という観念と共に、小屋は装飾の観念をその本質としない。装飾は偶発したものである。彼のこうした観点からは、ギリシャ人はローマ人に比べてあまり富裕ではなかったが、彼らの建築はローマの建築よりも望ましいということになる。だとすれば建築の目的は一層明確になるだろう：

「理性に相談しようが、モニュメントを吟味しようが、喜ばせることは決して建築の目的では有り得なかったし、建築術的装飾がその対象ではなかったことは明らかである。公共的な、そして特別の有用性や、個人や社会の幸福と保護のようなものが、最初に我々が観たように、建築の目的である。」²²⁾

デュランは、建築は喜ばせるはずはないと考えるどころか、「建築は、その本当の原則によって取り扱われる時、それが喜びを与えないということは有り得ない。自然は快を我々の必要の充足に結び付けなかったし、我々の最も快活な快は我々の最も差し迫った必要の充足とは別のものではないだろうか。」²³⁾と主張している。建築の美は、配置についてのみ専念される時、自然に見い出される。最も適合して最も組織的な配置が建築の本質的な対象である。構成と実現の芸術としての建築に近づくためには、この研究を幾つかの設計計画に限定したりして、それを簡略化することはできない。建築の本質を抽象しなければならないのである。方法論的には、その歩みは先ずは帰納的である。構成する前に、何をもって構成するのかを知らなければならない。理論的に帰納され

るものが続いて実践的に演繹されなければならない。

要素から一般的原則へ、単純なものから複合的なものへ、そして既知のものから未知のものへというのが、スタディの道筋である。この観点からは、デュランの著作は三つの部分から成っている。第一の部分は建築物の要素に関係する。第二の部分は全体的な構成に関するものである。様々な部分を建築物の全体構成の中で統合するためにそれらを集積させる方法について考えている。第三の部分で彼は、具体的に極めて数多くの建築物について可能な限り分析しようとする。というのも、それぞれの建築物に特有な小さな適合性の数多くの事例について知ることを、全体的な適合性を知ることの代わりにしてはならないからである。その場合に彼は、都市の周辺部、海への都市の開き方、橋、公共広場について研究しながら、建築物の各ジャンルの持つ特別な構成に特に興味を抱いている。これらの様々な都市的要素は、異なる建築的構造レベルに対応している²⁴⁾。

幾人かの理論家が、最初的小屋の形態や人体の比例をモデルと見倣しながら、建築が模倣によってのみ達成され得るものだとしているとしても、デュランは、「ギリシャ人によって創出され、ローマ人によって模倣され、ヨーロッパの大部分の民族によって採用された建築のオーダーは、これらの著者によれば、人体や小屋の模倣であり、その結果、建築の本質を成すものである。」²⁵⁾としている。そしてデュランは、装飾に特権を与えるこれらの著者の見解とは対立する見解を我々と共有する²⁶⁾。

デュランが「建築が模倣しながら喜ばせるために、他の芸術を手本にして自然を模倣しなければならなかった。」²⁷⁾と述べる時、「自然を模倣する」という記述は我々にとってはカトルメール・ド・カンシーの模倣の概念を想起させるだろう。我々は後に両者の概念を比較することになるだろう。歴史性という主題の下では、デュランにとっては、建築の理念的客観性を保証する理性は人間的な自然であり、その結果デュランは五つのオーダーの起源を小屋の形態や人体の比例に求めはしない。彼にとって、建築の本質はオーダー自体ではなく、自然的対象であって究極的にはそれらが含む必然性である。従って小屋の形態、人体の比例、五つのオーダーそのものを模倣することが問題なのではなく、寧ろそれらの必然性を、理性や人間的な自然と並行して建築的自然に属するものと見倣さなければならないのである。我々にとっては相互主観性に帰着される建築的歴史性が問題となるだろう²⁸⁾。

4. 要素と配置

第一章の「要素」の第二節の「材料の適用」の中でデュランは、建築のオーダーを扱っている：「建築のオーダーを作るために小屋に合わせて形作られても不合理ではない場合でも、少なくともそれは非常に無駄なことだろ

う。事物の唯一の自然が、そして唯ひとつの良識が、こうしたオーダーに属するあらゆる部分を指示するからである。」²⁹⁾。こうした「不合理」や「無駄」の彼方で、事物の自然を参照しなければならない。しかしそれはまだ必ずしも、カトルメール・ド・カンシーにとっての模倣すべき自然ではないし、あるいは、デカルト的な意味において、我々が既に相互主観性として論及した人間的自然に属するに違いない唯ひとつの良識でもない。実際、オーダーは荷重の支持システムを通じての必然性である。

デュランは、この著作の第二章の第三節「形態と比例」の中で、建築における模倣についての我々の問いにとっては興味深い分類を提案している。既に我々は、デュランにとって事物の自然とは何であるかについて考察を加えた。発生的あるいは発生論的な中立性の地平で、こうした形態や比例の間で、一方では、本質的に非歴史的な、つまり理念的なものが分類され、そして他方では古代の建築物に関わるものが一般に歴史的及び文化的なものとして分類されるのである。この場合に重要なのは、それらが互いに組み合わせられていることである。そしてこの連合の中にこそ模倣の神秘が存在し、模倣の出現の多様性はこの連合の歴史的及び文化的な位相の差異に依るものであると我々には思われる。これは我々の時代の問いでもあるだろう。

デュランは自由や歴史的な選択という点に関して、ジュリアン・ガデの折衷主義の道を準備することになる。彼は、オーダーの起源性の問いに結び付けながら、形態と比例についての建築のオーダーの存在理由について説明する：

「とりわけオーダーにおいてこそ、形態や比例の重要性が認められている。前節で既に観たように、主要な形態はこの場合、建築物の幾つかの要素の使用から発する。そして主要な比例も同じ起源を有し、またそれらを見出すためには人体の比例に頼る必要がないのは、オーダーの形態を見出すために小屋の形態に頼る必要がなかったのと同じであることが分かるだろう。」³⁰⁾

形態と比例はまた、幾つかの建築物の使用から、つまり機能主義における意味ではない機能としての必然性あるいは有用性から生じることを再びデュランは指摘している。しかしデュランは、円柱のディミニュエーション（細小化）、即ち柱頭と柱脚との比例の意味作用を、必然性の対象というよりも習慣の結果に由来する比例のうちの例外のひとつと見做す³¹⁾。異なるオーダーの輪郭の多様性は何から生じ得るのだろうか。必然性というよりは異なる習慣に依るものだろうか：

「異なるオーダーの輪郭は、その大部分は、我々が自ら作った習慣にのみそれらの長所を負っている。」³²⁾

更に単純化について論及しながら、デュランは彼自身のシステムを提示する。デュランは無意味な装飾の外部で、必然性、有用性、事物の自然という原理の上に彼の単純性を築いている。しかしながら、折衷的に沈殿化され、そして単純化、変形、変容あるいは自然化の恩恵を

得た、こうした原理によって実現された五つのオーダーそのものの模倣が問題になっていないだろうか。それは、五つのオーダーのある種の原初的な脱構築の恩恵によるものなのだろう。

デュランは、形態と比例についての彼自身の考察を完成しながら、それらと、より大きな快の源としての美との関係を明らかにしようとしている。その際、「壁から離れた円柱による柱廊が生み出す見事な効果についての最も驚くべき表を与えた後の」³³⁾ルロワの言説を彼は素晴らしいものと見做している。ルロワのこの引用の意味するものは、美はある所与の人々の形態や比例を模倣したものからであっても生まれるし、他方、建築の様式や、美とは別の自然である建築的「民族性」の彼方にもそれは位置しているという事実である。この思想は完全に「非様式的」なものである。もし美が与える快に形態や比例が必ずしも影響しないとすれば、何がこの大きな快を保証するのだろうか。デュランは答えている：

「その形態が如何に奇怪なものであろうが、その比例が精確でなかろうが、最も大きな快を生み出さずにはおかない建築物が有ったり、他方では、古代の建築物の全ての形態や全ての比例がそこに見い出されるにも拘らず、この上なく不快感を与える建築物も有ったりするのが分かるだろう。その理由は、これらの形態で覆われた対象は、前者の建築物においては単純かつ適合する方法で配置され、後者の方では、そうした対象は無意味にかあるいは間違って配置されているからである。」³⁴⁾

デュランは、「構成においては、もはや快との関係では形態も比例も取り扱うことはないだろう」³⁵⁾と結論づけている：

「配置が適合的である時、そしてそれが組織的である時、配置は、建築が自ら提起する目的を達成することによって、建築物が我々に感じさせる好感情の源になるのであり、だからこそこの配置に層取り組むことになるだろう。」³⁶⁾

この場合に我々は、デュランが配置についての恒久的な真理を求めていたことを理解することが可能である。それは形態や比例の相対性、あるいはまた習慣や有用性の相対主義から逃れているものである。彼は恒常的な定数としてエコノミー（組織性）の概念を用いながら、単純化の方途あるいは抽象化の方途を採るのである。

5. 構成と都市

第二章「構成」、第二節「建築物の部分」の最後で、デュランはなお装飾の虚栄性と配置の理性とを対峙させる。そして配置の価値と詳細の過剰との混同を嘆いている³⁷⁾。結局、装飾の浅薄な欲望が如何に実りのないものであるかを示しながら、諸芸術あるいは自然そのものがどのように我々を魅了するのかを彼は明らかにする：

「実際に、理性が我々を常に多様で常に新しい数多の装飾の言うなればすぐ身近に置く時、諸芸術が我々に自然の模倣を熱心に与えようとする時、そして最後に、自然そのものが我々にどこから見ても我々を魅惑することのできる多くの対象を提示する時、かくも偉大な、手に入れるのがかくも容易なこうした多くの利点を無視して、つらく実りのない努力を重ねて、装飾という空しい亡霊の後をしつこく追いか

けるのは、いかにも奇妙なことではないだろうか。」³⁹⁾

ここでもまた自然を参照することが勧められているのが分かる。

デュランは続けて、彼が構成において用いる方法は足枷的元凶などでは有り得ず、逆にその設計計画の発展を容易にし得るものだとして述べている。「もし我々に建築の真の精神が浸透しているなら」³⁹⁾、その方法は妨げとはならない。彼によれば、この真の精神は、建てることの必然性あるいは建築物の自然（本性）に照応している。この基本原則を否定し、評判やある種の栄光や虚像を手に入れようと望むとすれば、それは重大な過誤となる。

ここで隠喩的あるいは模倣的な類似性及び類推としての我々自身の模倣概念が見い出される。過誤は模倣の手前で創造したいとの欲望、模倣の内部で転写したいとの欲望から生じるのである。必然性あるいは類型使用の恒常性と、取りつかれたように「創造的な」、それらの変化あるいは断絶との間の混同がその原因となっている：

「従って、既に問題になっていたようなあらゆる観察を始める前に、建造しようとしている建築物の自然をよく知ることに専念しなければならない。通常建築物の有り得る全ての特質とはどのようなのか、その中でその建築物が最も著しく所有している特質とは何なのかを吟味しなければならない。」⁴⁰⁾

結局、建築物の自然はその特質に帰着される。例えば病院が問題である時は衛生に、監獄の場合は衛生と保安に、市場については清潔さに帰着される。各々の建築類型に固有な特質についてのこうした分析を経て、デュランは次のように続けている：

「理性が指示する方法をこの場合に用いることによって、全ての建築物を同じひとつの容易さと同じひとつの成功を伴って構成することが可能となる。」⁴¹⁾

ここでも用途の類型学が理性によって授けられている。

更にデュランはこの著作の中で、建築物の構想からひとつの都市建築全体の錬成に立ち戻っており、また彼のこの錬成の作業は、必然性を満足させる欲望と芸術に供する欲望に訴えかけるものである：

「かくかくの建築物ではなく、ひとつの都市の配置が問題なのだろうか。居住を衛生的なものにし交通動線を容易で安全で快適なものにするものは全て、建築家は探し出そうとするだろう。結果的に彼は、街路、橋、公共広場を共通軸上に置くだろうし、両側に柱廊を沿わせるかもしれないし、街路を形作る家々や広場を取り囲む公共建築物を、庭園によって、あるいは中庭や木の植えられた教会前広場によって切り離すだろう。異なった用途に当てられたこうした様々な建築物から結果する多様性は、全く同一の用途に当てられた柱廊の対称性に付加され、自然の対象と芸術の産出物のこの混合によって、装飾のことを考えなくても、いやもっと正確に言えばそんなことを考えないからこそ、最も多様で、最も見事な、そして最も演劇的な光景が与えられるだろう。」⁴²⁾

この場合、建築の要素及び集合の類型学は、都市のそれに共通している⁴³⁾。

「壁や円柱等が建築物が構成される要素であると同様に、建築物は都市が構成される要素である。都市の全体的配置は数多くの事情が異なれば変化するので、都市全体を建てるという機会には極く稀にしかないで、更に都市の構成において従うべき原則が各々の建築物

の構成において道案内とならなければならないものと同じであるので、都市の集合について我々が言うべきことは何もないだろう。この集合を形作る様々な建築物を吟味する前に、それらの周辺、入口、他の都市とのコミュニケーションに使われる部分については一瞥するだけに留めておかねばならないだろう。」⁴⁴⁾

ここでも重要なのは配置であって、装飾が問題にされていない。小屋や人体比例、オーダーの論議から始まった模倣の問題は、そうした微小単位から都市構成へ、スケールや構造レベルの差異を越えて相対的に妥当する、自然や必然性、適合性に関与する模倣として、「暫定的に」指定されるのである。

6. 模倣

デュランの模倣についての我々の考察を終えるために、彼の講義録の第二巻の「緒言」の部分を吟味しなければならない。この「緒言」の内容は、大部分は第一巻の序文で展開されている。しかし彼は模倣についての多くの新しい考えを持ち始めている。少なくとも彼はこの「序文」を自ら翻訳し、変形しているのである。ここで我々は、彼の視点が新たに何を捉えようとし始めたのかを考えることになる。眼を楽しませるというつまらない利点を前方に置き、有用性の概念とかけ離れたところで飾りを建築の目的であると見做す建築家の誤りを指摘した後、デュランは主張する：

「快が模倣から生まれるためには、模倣しようとするモデルは自然の中から取られた対象でなければならない。自然の外では我々は何も認識できないし、その外には結果的に何も我々に関心を抱かせるものはないからである。更にこのモデルの模倣は完全なものでなければならない。」⁴⁵⁾

この観点からは、小屋は自然の対象では全くないし、人体は建築的身体とは如何なる形態の類推も有しないから、それらは模倣のモデルとしては役に立たない。しかしこの主題について彼は続ける：

「二種類の身体の間には何らかの類推が存在するとしても、模倣を通じて楽しませようと望んで、建築家が明確で近い模倣ではなく、そうした模倣をしていると主張するように、あるいは画家や彫刻家がそうしているように、類推的即ち離れた模倣を選択するなどというのは常にこの上もなく愚かなことだろう。」⁴⁶⁾

建築においては、模倣は類推的でしか有り得ず、自然の中に直接的にはそのモデルを見い出すことはできない。模倣がそのモデルを自然の対象の中から汲み取る時のみ模倣の快が生じるとすれば、建築における模倣は快の真の源ではないということになるだろう。「何がしかの芸術によって採用される方法が有用であるためには、それがその芸術の自然 {本性} 及び我々の組織に関係のあるものでなければならないだろう。」⁴⁷⁾ という観点から、「適合性とエコノミー {組織性} は建築に固有の方法であるが模倣はそうではない。」⁴⁸⁾ との考えが生み出される。

実りのない模倣と建築の基盤としての必然性あるいは有用性との間のこうした曖昧な関係は、装飾が問題にな

る時にも現われる。一方では、建築学的な装飾は、「ひとつの空想的な模倣の上に築かれているだけなので、ほんの少しの快でさえ引き起こすことができないある種の形態やある種の比例の採用に基づいている」⁴⁹⁾。他方では、建築の本質としての配置が適合的で組織的である場合には、「自然によって我々の最も本物らしい快と結び付けられてきた満足という、我々の満たされた必要の忠実なイメージをそれが我々に表現するだろうからこそ、真に我々を喜ばせるために作られる別の種類の建築学的装飾を自然にそれは生み出すだろう」⁵⁰⁾。

「自然に生み出す」、これは何を意味するのだろうか。我々の最も本物らしい快と満足とを結び付ける「自然」とは何だろうか。このことが模倣の本質についての我々自身の問いである。デュランは答えている：

「(…) 現代作家はこうした互いに区別できるオーダーの中に建築の本質や装飾の形でのあらゆる美の原則を存在させるが、ギリシャ人は当時はそうしたオーダーの存在を認識していなかった。我々がオーダーと呼ぶものの中に、これらの人々は、支持するものと支持される部分のみを覗いていたのである。それらは、如何なるものであれ模倣によってではなく適合性の永遠の諸原則によって彼らが比例を与えた有用な対象だったのである。」⁵¹⁾

建築におけるこの収斂によって、オーダーは適合性の永遠の諸規則に他ならないということになる。そしてこの収斂は我々にとって重要な結論に至る：

「(…) 建築においてかくも輝かしい、ギリシャ人によって建てられた建築物を研究することが我々には極めて有利なことで有り得たのである。それによって、我々にはない幾世紀もの経験を埋め合わせることや、事物の自然を考慮することによってのみ、建築物の諸要素の形態や比例に関して我々が手にし得る恐らくは余りにも漠然とした考えを遂に確定することが可能にされたのである。」⁵²⁾

永遠の原理としての適合性と、オーダーの研究によって喚起される幾世紀もの経験との間の「共犯関係」によってのみ、「事物の自然を考慮することによってのみ建築物の諸要素の形態や比例に関して我々が手にすることのできる恐らくは余りにも漠然とした考え」が確定されるのである。事物の自然と、沈殿されあるいは発展する建築的意味との総合こそは、建築の客観的理念性を保証する、ミメシスとしての、建築的歴史性に他ならない。単に「歴史的」なものではもはやない歴史性そのものから発するこの模倣を、我々は「構成的模倣」と呼び得るだろう。デュランがどの程度までこうした理念を察知していたのかを我々は正確に知ることはできないが、何らかの拘束が課されていることを彼は完全に意識している：

「結局、我々がやってきた古代の全ての建築物の比較によってこそ、支持するものと支持される部分との比例において逸脱してはならない限界を、我々は探し出してきたのである。」⁵³⁾

類推的な模倣が多義的なあるいは曖昧なものに見做されるのに対して、古代の模倣は寛大さと共に見られる。しかしこの模倣をデュランは容認し、そして推奨さえしているとしても、彼が好むのはオーダーの模倣ではなくモチーフの模倣であり、とりわけ神殿のモチーフの模倣

である。しかしながらその理由は、「全ての古代建築物の中で、神殿が最も多く我々に残されている」⁵⁴⁾ということだけである。

デュラン及びティボーの「平等神殿」の計画案 (1794)
(フォン・クレンツェの模写による)

7. 古代の模倣

にも拘らず、古代の模倣を通じての、デュランの最も重要な設計計画のひとつである「平等神殿」の計画を吟味することによって、我々はひとつの新たなそして興味深い見方を手にすることができる。F. ブロンデルの円柱式建物の正確なモデルに従わないで、デュランとその協力者のティボーは、円柱式建物の古代のモデルを慣習的な技法として再解釈した：「平面図は、オーダーとそれに比例した円柱間の価値の完全な否定である」⁵⁵⁾。これもある種の脱構築の試みである。「平面だけではなく立面の神聖をもけがすこと」、それは我々には彼らの標語であるように思われる：「革命の神聖な価値が、古代の価値の占めてきた地位をもぎ取りつつある」⁵⁶⁾。彼らにとっては、それこそは「様式において新しく、性格において独創的なもの」である。ヴェルネール・サンビアンはこの神殿について次のように問いかけている：

「この建築物は、我々が用語として与える意味での類推的模倣を、つまり感覚に作用する類推的模倣を目的とはしていない。その代わりに純粋に文字どおり「語る」関係が目的とされる。というのもそれは、美德の数々が平等を支えるということのひとつの説明に他ならないからである。この場合に建築形態は語として機能する。模倣のどの段階に平等神殿はこの時、対応しているのだろうか。これは、その支持部材を人間のあるいは神のイメージの表象として表現するような明確な模倣に向かってはいないだろうか。あるいはまた、建築形態の饒舌な言語が、語の一層正確なそしてとりわけ曖昧でない言語、つまりこの場合にはもはや感性にではなく理性に差し向けられるひとつの言語に取って代えられたことからすれば、それは恐らくは明確な模倣にされた類推的な模倣であるのだろうか。そしてもしこのことが全く本当だとすれば、この概念によってデュランは明確な模倣を企てることを決定的に思い止まされはしないのだろうか。それが本当だとしても、平等神殿は古代のモデルと比較されるものとしての想像的な創造を表す。その場合にこの古代のモデルからこの創造は専ら何らかの特徴を得たのである。従ってそれは、自然の模倣でも、17世紀の理論家たちによって示唆された系譜にある古代の正確な模倣でもないし、巨匠の模倣そのものでもない。というのもこの設計計画の上に描き得るような具体的なモデルを何ひとつ

我々は知らないからである。我々はこの場合に革命の宣伝の必要をその第一に考慮すべきこととした純粹で単純な創出を前にしているのである。」⁷⁾

神殿は、私的な建築のためのデュランのモデルのひとつに留まっていた。しかしデュランの私的な住宅は、そのモデルになった彼の平等神殿との関係よりも一層複雑な関係、つまりその平等神殿の古代の推測的なモデルからも離れている神殿との関係を、なおも表現しているのである。これは類似というよりも寧ろ語源学的関係である。デュランの場合にある種の「類似性」を見出し得る時にも、彼は若干の距離を維持している。従って我々はひとつのモデルが完全に模倣されているなどと断言することはできない。この模倣は、類推的模倣でも明確な模倣でもなく、その中間を漂いながら古代性を暫定的な核とする変形である。それは原初的な、しかし当時としては革新的なひとつの脱構築の試みであった。古代の模倣を通じてこれ程まで沈殿作用が意識化されている以上は、ある程度の脱構築を伴わないわけにはいかないからである。

8. 結論

省察すれば、デュランによれば構成と実現の芸術としての建築の目的は有用性、保護、幸福であり、そのための方法は、建築が「自然に」援用するはずの適合性とエコノミーであった。殊に適合性については、個々の建築物の「小さな」適合性の知を全体的な適合性の知に代用してはならないとされた。また建築の本質は小屋の形態や人体比例、オーダーではなく、自然的対象でありそれらが含む必然性であった(3章)。彼は形態や比例の問題を考えるうちに、本質的に非歴史的理念的なものと古代の建築物に関わる歴史的文化的なものを意識することができた。我々にとってはその連合の中にこそ模倣概念の本質が存在するのであるが、彼はまだその全貌を捉えていたとは思われない。形態や比例、習慣、有用性等の相対性から逃れた恒常的な定数としてエコノミーの概念を用いながら、模倣的単純化を目指していた(4章)。このような視点からは、もはや装飾を重要視することは有り得ず、スケールの相異なる場合にも相同的に普遍化し得る自然や必然性、適合性に関与する模倣こそが問題とされた(5章)。しかし模倣の概念をカトルメールに比べてまだ適確に捉えられないでいるデュランの内部には、「適合性とエコノミーは建築に固有の方法であるが模倣はそうではない」というような矛盾が存在し、だからこそ彼は永遠の原理としての適合性と幾世紀もの経験との間の「共犯関係」に「暫定的に」注目し、「事物の自然を考慮することによってのみ建築物の諸要素の形態や比例に関して我々が手にすることのできる恐らくは余りにも漠然とした考え」を確定することを、彼の思想の基盤に据えたのである(6章)。

デュランにおいては古代の模倣はある種の偶然性を伴って遂行されるのである。というのも彼は、古代の建築物の美を一つの結果、つまり用途や任意の原則、習慣によって演じられる役割と見做しているからである。このことによって古代の形態を使用するためのひとつの尺度が与えられる。それ故、デュランが明確な模倣を不可能な模倣として記述し、類推的な模倣に反駁を加えているとしても、彼においては古代の模倣は、建築の目的としてではなく、エコノミーや適合性の下位の補助的な要素としてなおも現前するのである。

しかもそれを、建築とは構造レベルが相違するにも拘らず、都市の要素や結合、配置や構成にまで「相同的に」拡張し援用していた。寧ろ建築と都市とを区別しながらそうした中心概念を考えるなど、彼の思考の中には殆ど前提として存在していなかったと言えよう。都市建築として全一的に把握されていたのである。デュランにおいては、模倣概念は下位的な古代の模倣に変質しながらも、都市建築の通時的な照応関係や遠い近いに関わり合いの共時的なコンテクストにおける、間テクスト的な意味の運動のひとつの契機として捉えられ、従って古代性という限られた枠内の都市建築的な類型意識に支えられていたのである⁵⁸⁾。

註

- 1) この論文は、フランス政府科学部門給費留学生として1982年7月から87年11月までパリに滞在していた際の、パリ・コンフラン建築大学におけるD.P.L.G.取得論文及びパリ・ベルヴィル建築大学におけるC.E.A.A.取得論文を基に、限定された主題について再解釈したものである。
- 2) 元来、西欧においては建築学が都市計画を包摂している。近年、都市建築という概念が、都市と建築を分離しないで一体のものとして把握し、街路、広場、建築物、公園等を総合的に捉えようとする伝統的な視点を表す用語として西欧で広く用いられている。
- 3) テクスト理論及び意味の問題については、拙稿：建築形態の記号論的考察、日本建築学会近畿支部研究報告集、1982.5, pp.641-644 及び Barthes, Roland : Texte (Théorie du), Encyclopaedia Universalis, vol.15, Paris, 1973, ロラン・バルト、花輪光訳：テクスト、その理論、現代思想、vol.9-7、青土社、1981.7、等を参照。
- 4) この点に関してル・コルビュジエの「東方への旅」の場合を論じたものとして、拙稿：LeCorbusierの六手帖<<Voyage d'Orient-Carnets>>に関する類型学的一試論、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989.6, pp.965-968、を参照。デュランの場合と同様に、ル・コルビュジエにおいても、「東方への旅」における経験がある種の「古代の模倣」として彼のその後の著作や作品に繰り返し現われているが、しかし彼の場合にはデュランにおけるほど単純なものではなく、寧ろカトルメールの言う自然の「理念的模倣」への強い志向が見られる。この点については以下の著作を参照。ル・コルビュジエ、中村・松政共訳：ル・コルビュジエの手帖---東方への旅 (LeCorbusier (Ch.-E. Jeanneret) / Voyage d'Orient Carnets)、同朋舎出版、1989.7。また「脱構築」はジャック・デリダによれば、「ある概念から他の概念へと移動することではなく、何らかの概念の秩序を、そ

れを分節化している非概念的な秩序とともに逆転させ、その位置をずらすこと」（「哲学の余白」）である。近年、P.アイゼンマン等によって建築の領域に援用され、「デコンストラクション建築」として広まっているが、それは必ずしもデリダの思想やそれと関係する思想を適確に捉えた上での「翻訳」ではなく、形態上の手法でしかない場合が多い。このデリダの思想やその周辺の概念についてはここでは詳しく論及しない。この論文の続編において、都市建築を捉え直すことを可能にするものとして、詳しく論じられなければならない。

- 5) A.Ch. Quatremère de Quincy. 白井秀和の一連の論文において彼の思想については明晰に分析されている。この論文の続編(2)で詳しく論及したい。
- 6) économie は、通常は経済、経済学、節約等の意味に用いられることが多い。デュランもその意味で使用している場合も見られるが、殆どは組織性、組織、構成等の概念として使用している。現代でもしばしば同様の意味で用いられる。
- 7) Claude Berthelot de Rambuteau (1781-1869), Georges Eugène Haussmann (1809-1891)。共にパリを含むセーヌ県の知事として、パリの都市改造に取り組んだ。特にオスマンは、ナポレオン3世の権力を背景に、パリの相貌を一変させた。詳しくは、松政他7名、インターシティ研究会編：都市ストックを創る、学芸出版社、1992.8、等を参照。
- 8) この流れの中で、ジャック＝フランソワ・ブロンデルとジェルマン・ボフランもまた、様式の修辞学的概念と性格の模倣的概念の間の関係を打ち立てようとしていた。
- 9) 17世紀から19世紀前半にかけてのフランス古典主義建築思想については、白井秀和の学位論文を始めとする一連の論文において明快な論及がなされている。
- 10) プレとの関係については Szambien, Werner : Jean-Nicolas-Louis Durand 1760-1834 De l'imitation à la norme, Picard, Paris, 1984, p.36、等を参照。
- 11) 彼のこの主著の第1版と第2版との相違については Szambien, Werner, op. cit., pp.200-204 を参照。
- 12) 参照（レフェランス）という概念は、現代においても一層その間テクニクの視点から重要なものとなっている。
- 13) 「離れた模倣」については、ポール・リクールの「生きた隠喩」に沿って近い類似性と離れたあるいは遠い類似性の間での隠喩的区別について論及する時に詳しく吟味することになる。
- 14) Quatremère de Quincy, A.Ch. : Encyclopédie méthodique, Architecture, Paris, Liège, 1788, p.121.
- 15) Durand, J.N.L. : Précis des leçons d'architecture données à l'Ecole polytechnique, 2vol., Paris 1802-1805, vol.1, Edition de 1819, 翻訳は筆者による（以下同様）。
- 16) Ibid., p.6
- 17) Ibid., p.8
- 18) 自然と模倣との関係については、例えば以下の著書等でピュシス(phusis)とミメーシス(mimesis)との関係として興味深い論及がなされている。Lacoue-Labarthe, Philippe : L'imitation des modernes, Typographies II, Editions Galilée, Paris, 1986.
- 19) Durand, op.cit., p.9
- 20) Ibid., p.16
- 21) Ibid., p.17
- 22) Ibid., p.18
- 23) Ibid., p.19
- 24) 彼はそれらの関係を扱い、彼自身の観点において、建築についてのアルド・ロッシの見方と一致することが、やがて我々がロッシの「都市の建築」等を問題にする際に明かになる。厳密に言えば、ロッシは、デュランの思想について研究した時、この建築的類推の概念を知っていた。デュランはこの著作の中で、大公共建築物の現象について、続いて住宅について分析している。

- 25) Durand, op.cit., p.8
- 26) 装飾に認められた優越性に対しての彼の批判に関しては、我々が「建築における民族主義と民族性、あるいは地方主義と地方性」の問いについてやがて考える時に、模倣が我々にとってはなお問題となるだろう。それはまた、ジャック・デリダが「哲学の民族主義と民族性」というタイトルの一連の講演の中で展開している思想を基礎にした我々の研究である「建築における固有語あるいは民族性」の問いとなるだろう。
- 27) Durand, op.cit., p.9
- 28) 相互主観性と歴史性については、例えば以下の著作において深い省察が加えられている。Husserl, Edmund : L'origine de la géométrie, Traduction et introduction par Jacques Derrida, Presses Universitaires de France, Paris, 1974, エドムント・フッサール、ジャック・デリダ序説、田島節夫他2名訳：幾何学の起源、青土社、1980.4。
- 29) Durand, op.cit., p.43
- 30) Ibid., p.54
- 31) 輪郭を描く芸術については、オーダーの輪郭が三つの原則に帰着される時、「民族的な」あるいは「地方的な」相対性が存在する。これも我々にとっては建築における「固有語」あるいは「民族性」の問いとなる。
- 32) Durand, op.cit., p.61
- 33) Ibid., p.70
- 34) Ibid., pp.70-71
- 35) Ibid., p.71
- 36) Ibid., p.71
- 37) Ibid., pp.89-90
- 38) Ibid., p.90
- 39) Ibid., p.96
- 40) Ibid., p.97
- 41) Ibid., p.97
- 42) Ibid., pp.98-99
- 43) 「最も多様で、最も見事な、そして最も演劇的な光景」という表現は、アルド・ロッシ及び彼の「演劇的都市」を我々に想起させないだろうか。このことは後に我々がロッシと共に研究することになる問いの対象であり、やがてその時にはデュランに関してもまた論及することになるだろう。
- 44) Durand, J.N.L. : Précis des leçons d'architecture données à l'Ecole polytechnique, 2vol., Paris 1802-1805, vol.2, Edition de 1817, p.21.
- 45) Ibid., p.5
- 46) Ibid., p.6
- 47) Ibid., p.6
- 48) Ibid., p.6
- 49) Ibid., p.7
- 50) Ibid., p.7
- 51) Ibid., p.11
- 52) Ibid., p.11, 傍点筆者（以下同様）。
- 53) Ibid., p.11
- 54) Ibid., p.35
- 55) Szambien, Werner : "Regular" architecture, imitation in Durand, Lotus international 32, Electa, Milano, 1981, p.109.
- 56) Ibid., p.108
- 57) Ibid., p.109. 英文の not unequivocal は伊文では non equivoco とされていて、意味が逆になっている。内容から判断して伊文が正しいと思われる。
- 58) デュランの模倣概念については、この論文の続編(2)でカトルメール・ド・カンシーの模倣概念について論及する際に、両者の相異点の比較を通じて、再びその限界と問題点が指摘されるはずである。

(1994年3月10日原稿受理, 1995年1月20日採用決定)